

史遊会通信

No. 172
平成21年1月18日
発行

事務局
☎ 03--3712
0651
下山田方

十一月特別講演

性と化粧

— 性器表示の化粧 —

鈴木 守

私は、かつて化粧品技術者会誌に「化粧品は、体毛が退化した頃の祖先が日焼け防止に泥土を塗ったことから始まった」とする仮説を発表した。その後、日焼け防止の泥化粧が様々な化粧に分化し、多様な化粧品を生み出してきた過程に興味を抱くようになった。

このことについては、同人誌『まんじ』に連載中であり、本稿では、泥化粧から美を演出する化粧へ変遷する過程で、性器表示の化粧が重要な役割を果たしていたと思われるので、『性と化粧』に焦点を当てることにする。

① 日焼け防御の泥化粧

前出の化粧品ルーツ説を支持する資料として、現代の原始社会でも、ナミビア・ヒンバ族の女性が赭土を日焼け止めに使用していることが週刊誌やテレビで報道されており、また、四〇万年前のテラ・アマータ原人も日焼け防止とともに、狼の安全と豊穡を祈願して赭土を塗布したという資料もある。

② 呪術化粧の発祥

体毛が退化し始めた当時の早期人類が紫外線の影響で日焼けすると認識していたとは思えない。現代でも、未開社会の一部に

例会のお知らせ

◎ 1月総会

日時 平成21年1月28日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

議題 * 前年度事業報告

* 同 会計報告

* 21年度事業計画

* その他

◎ 総会終了後

講演 島津隆子氏

テーマ 未定

自由執筆は森下征二・佐藤健一・相原精次の諸氏。締切り 1月末

◎ 2月例会

日時 平成21年2月25日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

講演 太田精一氏

テーマ 未定

自由執筆は平山善之・中込勝則・島津隆子の諸氏。締切り 2月末

魔除け目的で白泥を塗っている事実があるので、彼らは日焼けを魔物の仕業と信じていたであろう。彼らにとって、「目に見えざるもの、認識されざるもので、身体に害を与えるものが魔物であった」はずである。したがって、紫外線を防ぐ泥化粧を魔除けの護符に位置づけていたとしても不思議ではない。

また、赭土は赤酸化鉄を含む泥土である。鉄イオンには収斂作用があるので、日焼け後の火照りを鎮静させたり、創傷治癒効果もある。このような効果を重視して、「人は赭土の創傷治癒効果を発見し、それを塗布し始めたのがルーツである」と主張している論文さえみられる。

赭土がルーツかどうかは別として、単なる泥土とは違って日焼け防止だけでなく、薬理効果により日焼けを鎮静し、傷を癒すことができるので、光の強いサバンナ地帯の山野を跋涉していた原始人類にとって、赭土は霊薬だったに違いない。このことが、テラ・アマータ原人に見られるように、魔除け（除災）と同時に豊穡祈願（招福）の呪術化粧に進化させたと推定される。

③ 宗教観、抽象能力の萌芽

人類は、本質的に宗教観や抽象能力を有していたといわれており、猿から進化した人類は、猿人から原人の時代に向けて脳容積を拡大して思考能力を充実させ、脳の機能が活発になるにつれて、抽象化や概念化の能力を確保し、宗教感を抱くようになったと考えられている。

このような知的能力の進歩によって、赤い色調に対する概念も持つようになったのであろう。テラ・アマータ以前にも赭土使用の形跡があり、その後も赭土を遺体に散布した考古学的資料が各地に残されていることは多くの書に見られる。

④ 性器信仰の発祥

初期の人類は、霊魂や災厄をもたらす魔物は身体のか、目・鼻・口・耳・陰部から出入りすると信じていた。そのため、出入り口に魔除けの護符を施すようになり、やがて、性器を崇める原始宗教へと進展したと推定されるが、性器信仰発祥の過程を眺めてみよう。

人類にも、生物的自己保存と種属維持の本能が備わっている。魔除けは専ら、自己の安全を願うものであるから、自己保存の本能に基づいて発生した呪術であつたが、

種属維持の本能は、子孫繁栄の概念をもたらし、それを実現してきた祖先、ならびにそれを担う母体が崇拝され、それらの姿を象った偶像信仰が始まったと想定される。

他方、魔除けの護符が施されていた陰部は、種属繁栄の象徴として信仰されるようになり、カメルーン出土の祖先像には男性性器が備わり、ビレンドルフの妊婦像には性器が刻まれている。性器信仰の典型例として、ギリシャで発掘された新石器時代の女神像がある。この女神は、開脚した足を持ち上げて女性性器が強調される姿勢をとっている。

石器時代以降も、性と信仰の関係は維持され、南アジアではリンガ像やヨーニ像が信仰の対象になっており、日本でも夫婦松や夫婦岩に子授けや夫婦和合を祈願し、男性性器が神体の神社もあり、江ノ島の裸弁天の股間には刻みが彫られている。

⑤ 性器表示の化粧

性の文化は神話にもみられる。日本神話のイザナギとイザナミの国造りは、セックス・ストーリーである。ギリシャ神話も然りである。かように、神話は国や民族誕生の物語であるから、セックス・ストーリー

でない方が不自然である。ティツィアーノの『エデンの園』の絵では、アダムとイヴの股間はイチジクの葉で隠されている。この光景を恥部隠蔽と見做す人が多いが、一条まとわぬ姿で目につきやすい形で被覆すれば、隠蔽ではなく性器表示と判断するのが自然である。いうまでもないが、見せられるより隠される方が興味を抱くのが人情であるから、これは性器強調であり、ティツィアーノは、股間にイチジクの葉を配し、性器表示の化粧を施した古代ヘブライ人の風習を比喩したのではないかと勘ぐりたくなる。

性器表示の化粧としては、現代の裸族女性の中には、性的魅力を高め、男性を興奮させる目的で、股間に癢痕を施している例がある。また、性器表示の化粧がルーツであるという説があり、「原始人の中には、生殖器に入墨をしたり、赤く彩色するなどの風習が古くから変わらずに続いている例もある」と述べている文献もあるので、性器表示の化粧は古くに発祥し、現在まで維持されているのであろう。因みに、前出ヒレンドルフの妊婦像の刻みに赤色顔料が残っているという。

⑥ 美を演出する化粧

現代人は男女を問わずイケメンを好み、美しく見せたいために化粧をすることは調査結果から明らかである。このように美に執着する人間の性向は、性本能によって導かれた心理状態である。したがって、美意識発祥の一端について考えてみよう。

猿から進化した初期人類は、オープンランドに下り立ち集団を組んで、猛獣と戦いながら生きのびてきた。この間に、連帯感や信頼感というような情感が培われたであろう。また、霊域や魔物といった概念も萌芽したであろう。

およそ一四〇万年前頃に、人類は火を使用するようになった。火の使用は魔物や猛獣に対する恐怖を軽減させ、心理的な裕りをもたらすに至った。その結果、信頼感などの情感は心理的に抽象化され、愛情に移行し美意識獲得の前提となった。また、体毛が退化した肌に快感を覚え、その姿態に美を感じたのではないか。

愛と美が性から生じたことを示しているのが、『愛と美の女神・ビーナスの誕生』である。ギリシャ神話では、「天ウラノスが大地ガイアの女体に覆い被さると、ガイ

アの手引きで隠れていたクロノスは、勃起したウラノスの男根を切り取り投げ捨てた。海上に落ちたウラノスの男根は精液を放出し、泡となった。その泡からビーナスが誕生した」と物語っており、愛と美は性より発祥したと示唆している。そのうえ、神話では美的な化粧の発祥について、「ビーナスが化粧を発見し、侍女ヘレンが化粧を広めた」と述べている。

このようなことから、「愛は性本能が心理的に分化したものであり、愛が美意識を情緒的に抽象化した性本能に育てたのだらう」と理解するようになった。

では、人類に美的感覚が発祥し、美を演出する化粧がいつ頃から始まったのであろうか。四万年前頃のマドレーヌ文化の彩色壁画やオーリニヤック文化のビーナス像などから、この時期の人類には美的感覚が備わっていたと言っても否定する人は少ないであろう。

それ以前、約五万年前には装飾品のビーズが作られ、七万七千年前には長方形のオーカーの塊に幾何学的な模様が彫られ、さらに古く、ほぼ二〇万年前頃には装飾的石器が作られていた。

以上の内容から、美的目的の化粧が発祥した歴史を概述すると、「猿から進化した猿人はサバイバルな生活の中で様々な情感を育み、火を使用した原人は生活の裕りから愛の情念を獲得した。そして、ほぼ二〇万年前頃までに、事物を識別する五感に、愛の情念が働きかけて美的感受性を芽生えさせ、遅くとも四万年前までに性器表示の化粧から美を演出する化粧をスタートさせた」ということである。

⑦ 性器彩色化粧のその後

性器表示の化粧は、装飾的な化粧や衣装着用が進むにつれて衰退していったが、その後の運命について検討しておきたい。

古代南アジアの住民は、半裸の生活でボディ化粧を施し、リングやヨーニの信仰が盛んだったので、性器に彩色していたと思えるが、その資料は未だみていないし、衣服をまとって日本に上陸した人々が性器表示の化粧を施したという資料もない。

したがって、性器を赤く彩るのが主体だったので、その後の人類が培った宗教、美あるいはエロスの文化と赤の文化がどの様に結びついていたか調べてみよう。

呪術から発展した宗教界には、魔除けと

招福の概念が未だに根づいている。

宗教観に基づく招福には、恩恵や救済が含まれ、ヨハネの黙示録に見られる神は赤く、中世の国王や国旗、赤十字などの象徴的表示にも赤が多く使われている。

除災には、魔除け、破魔、護身、護国などの意味もあり、鳥居、仁王像、袈裟、緋緞の鎧、漁師の禪などに赤が汎用されている。天蓋、花道、幔幕に赤が使われるのは、天界、地界、空界から襲う魔物に対して用意されたものであろう。赤化粧の口紅、爪紅にも赤が使用され、口紅は魔除けの延長であり、武器である爪は赤く染めて破魔を象徴したと思われる。

美が融合した赤の文化は、衣装にしばしば認められる。例えば、浮世絵をみると、帯、小袖、襟つけ、長襦袢、腰巻などに赤が使われ、裾からこぼれる出る赤は男性の心を揉み目を楽しませてくれる。

エロスと赤の文化が結びついた例は、絵画、文学、映画などに数多くみられ、江戸時代の枕絵には、除災・招福の赤に包まれ、安心して性の悦楽を堪能している図が描かれている。これは、将に「赤、性、美、愛が融合した世界」であり、太古の人類が育

んだ性器表示の赤化粧を象徴しているように感じられる。

⑧ あとがき

振り返ってみると、裸の猿になった人類は、遅くとも初期原人の時代に、泥土による日焼け防御の化粧、次いで赤土使用の呪術化粧を施した。前期旧石器時代には性器表示の赤化粧を分化させたのである。中期旧石器時代以前の頃から美的感覚発祥の兆しがみられ、後期旧石器時代初頭・現代型ホモ・サピエンス発祥の頃までには、美を演出する化粧が誕生した。さらに、衣服着用が進むにつれて、性器表示の化粧は衰退の道を歩んだが、現代においても、その残映は赤の文化の中に包みこまれていたのである。

(了)

※会員の活動

★新井宏氏講演会

日時 一月二十五日(日)午後一時三〇分
会場 文化シャッター櫛B Xビル
演題 「歴博 炭素14年による年代遡上論の問題点」
参加費 千五百円

自由執筆

サブプライム問題

新井 宏

韓国の都市には、やや古びた一戸建ての住居があるにはあるが、大部分は高層集合住宅である。全国ベースで既に、半数以上がアパートやマンション暮らしで、私も大学が準備してくれた二十二坪型アパートに住んでいた。

韓国の集合住宅は、二十五坪型、三十三坪型、四十四型、五十一坪型が標準で、日本よりもはるかに広いが、私の場合は、単身赴任でもあり、築後五年ほどのチョンセ方式のアパートであった。チョンセ方式と言うのは、売買価格の七割程度を家主に供託すると、契約期間（通常二年間）は、家賃なしで住め、契約終了時には、供託金がまるまる戻ってくる仕組みである。

実に不思議な仕組みであるが、理由は簡単である。中古アパートやマンションが毎年値上がりしているからである。チョンセの家主は、購入価格の三割だけ準備すれば、値上が益を得ることができるのである。

実際に即して言うと、私が入ったアパートの売買価格は当初五百万円であったが、七年後には千万円と二倍になっていた。だから、もし大学でアパートを準備してくれなかったら、五百万円を買って七年間タダで住み、千万円で売って五百万円儲けることができたはずである。すなわち、チョンセの家主なら百五十万円の投資で、七年間で五百万円儲けることができたのである。

実は、アメリカのサブプライム問題も同じである。すなわち中古住宅が値上がりするという計算の上で、新築した家を担保に融資を受け、値上がりを待って、更に融資を受け続けていたのである。これなら、無一文、無収入でも家が持てる。

そもそもサブプライムは「非優良者」を意味する。融資の優良適格条件をブライムと言うなら、サブプライムは融資不適格者のことを婉曲に言った表現である。当然、サラ金ほどではないにしても金利が高い。

米国の禿たか金融専門家は、この高金利の債権を一般の優良債権と組み合わせる新らしく高金利の金融商品として発売し、その上、この金融商品が、デリバティブ商品、すなわち先物取引のような投機性の高い商

品として世界中を駆けめぐったのである。

そもそも中古住宅が値上がりし続けるわけが無い。次々にサブプライム融資を行い、マルチ商法的に回転しているうちは値上がりが続いても、値上がりが止まった途端、坂を転がり落ちるしかない。

マルチ商法と言え、サブプライム債権を他の債権と組み合わせたことも、デリバティブ取引そのものにも、マルチ商法的である。金融商品の売買というのは、ゼロサムのゲーム、すなわち儲けた者がいればその分だけ損をする者がいて、全体としては絶対にプラスになることは有りえないゲームである。

ところで、先物取引の歴史は一七三〇年に江戸幕府が、大阪堂島米相場会所に対し米の先物取引を許可したのが始まりである。これ以前にも、大阪やロンドン、アントワープでも先物取引的なものはあったが、近代的な商品先物取引の嚆矢は堂島米会所であり、シカゴの商品取引は一八四八年からである。大名達が青田の内に米を売りわたし、借金地獄に陥ったのも、飢饉に際して百姓だけに餓死者が続出したのもこの先物取引と無関係ではない。

自由執筆

天竜川水系の銅鉱山と

三遠式銅鐸

中山 喬史

私の亡き母の実家は天竜川が太平洋に注ぐ河口西岸域の浜松市・長田町にある。おふくろの在所にはよく遊びに行つたし、その懐かしい思い出は原風景として心に深く焼きついている。

だから天竜川の中流域、佐久間ダムの近くにある久根鉱山のことは知っていた。

一方銀行定年退職後始めた考古学の勉強で、弥生後期の初頭の頃、同型式の銅鐸が愛知県東部の三河と静岡県西部の遠江で多数見つかつており、三河と遠江の頭文字をとって三遠式銅鐸と呼ばれていることを知った。

ところが最近新井さんから『鉱山地質』32巻「日本列島の鉱床鉛同位体比」の資料を提供していただき、その中に久根鉱山と同じく天竜川水系に存在する大井鉱山の鉛同位体比が掲載されていた事から、掲題の鉱山と銅鐸に結びつきがあるのではと考え

るにいたった。

その鍵は大井鉱山の鉛同位体比指数のうち206pbを204pbで除した指数が17.465、17.491と、従来測定されてきた日本列島の鉛同位体比指数のなかでは最低数値を示し、三遠式銅鐸のこの指数17.699～17.746を下回ったことにある。

これ以前のこれに関係する日本列島産鉛同位体比指数の最低数値は、676 秋田県・太良鉱山の17.711で他に17台の数値を示すものがなく、従って他の指数が合致しても、日本列島産の鉛を使用したということが立証できなかった。

一方朝鮮半島産、中国大陆産のものには17台及び16台の指数を示すものはあったが、肝腎のA式図関係の数値が離れており、何れのものか特定できなかったのである。

しかしこの大井鉱山の指数が明らかになった事により、他の勘案条件である交易の流れとか文化の交流等、様々な複合的要因が符合する日本列島産の銅鉱石を使用した可能性を説明することが出来たのである。

すなわち三遠式銅鐸のA式図関連の207/206は0.8755～0.8771、208/206が2.1634～2.1661であるが、これに最も近いものと

して676 太良・秋田と53茂住・神岡の平均値0.8756と2.1620がある。

次いで、B式図関連数値は三遠式銅鐸が17.696～17.746、15.517～15.546、38.301～38.414であるのに対し、70大井・静岡を二割、676 太良・秋田と53茂住・神岡の平均値を八割にして算出すると、17.781、15.589、38.340と三指数がそろってほぼ符合し、三遠式銅鐸の地元にある鉱山の銅を使用していたことが浮かび上がってきたのである。

この天竜川水系の銅鉱山につき若干説明する。

○久根本山―結晶片岩中、含銅硫化鉄鉱。銅1.0～7.0%、硫黄30～40%、軽少の亜鉛、磁鉄鉱、コバルト、銀等を含む鉱床の幅員、広い所約40m、延長約300m、深さ約600m。

○大井鉱山―結晶片岩中、銅品位約4.0%、幅50cm。

○峯之沢鉱山―結晶片岩、含銅硫化鉄鉱床、銅0.9%、硫黄20%の原鉱。

○その他―高遠鉱山（キースラーガー鉱床で銅を採掘）、赤石鉱山（銅を採掘）、大野鉱山（鉱床幅30cmの銅鉱山）、名合支山

(久根鉾山と一体)等。

これらのことを踏まえて当時の銅鉾石の流れと銅鐸の出土状況その他の地域動向を考えると非常に整合性があるのである。

すなわち天竜川水系の鉾山で採掘された鉾石の一つの流れは、遠州森町に流れ、そこで荒銅等に加工されて太田川經由で東国に流れた。森町史通史編上巻の39頁には、『世代万季』「西金谷八幡は大社にて田辺九郎右衛門と申す鋳物師あり、大宝二年(七〇二)壬寅、本郷長福寺鐘を鋳候」という記載がある。また銅鐸は掛川と敷地で出土している。これは日本列島東端のものである。

もう一つの銅鉾石の流れは、鹿島から都田川の方向に向かった。こちらでは「銅鐸の谷」として全国に知られている地点があるように、都田川流域の狭い谷間で多数の銅鐸が出土している。更にこの地は、南北朝時代井伊氏が宗良親王を奉じて、圧倒的に優位な北朝の大軍に頑強に抗戦したことでも知られているが、その力の源泉は、井伊氏が天竜川水系の銅鉾山の流通経路を抑えていたことに起因すると考えると大変整合性がある。

自由執筆

「黒小丸」随想 (二)

高橋 由貴彦

私は或る茶会に呼ばれて味噌汁を出されたことがあったが、いつも何んでもなくたべていたあのどろどろの赤土色をした汁が、覚束ない蠟燭のあかりの下で、黒うるしの椀に澱んでいるのを見ると、実に深みのある、うまそうな色をしているのであった。

長い引用だが全くそのとおりで見事黒小丸の美を言い当てている。

懐石(茶懐石)は利休が確立した侘茶の茶事として空腹をしのぐための食事作法で、一汁二菜か一汁三菜(汁、向付、煮物椀、焼物)が基本で、それに小吸物、八寸(酒の肴)と最後に湯斗と香の物で終わる。ただ当節は預鉢や強肴などが加わっている。

一方会席と称する酒のための宴席料理がある。室町時代に誕生した接待目的の「本膳料理」の豪華絢爛を主眼としたもので、江戸中期の明和・天明にはこれら料亭は繁盛した。なかでも趣味人の升屋喜右衛門が

主人の、当時海岸の州崎の「升屋」(現・木場一丁目あたり)は、通人、藩名代の接待場として栄え、寛政三年の天津波で衰退してからは、かの有名な八百屋の善四郎の「八百善」や、深川大橋(現・新大橋)の「平清」が登場する。中でも「八百善」は、大川から山谷堀までちよき舟できて、日本堤から新吉原に遊ぶ最も豪華なみちの途中にあった。それは舟をおりる新鳥越橋のたもとにあったため、いきおい大繁盛を極めたらしい(現・今戸の台東商高あたり)。

あの有名な話の種になっていることだが、当時めずらしかった瓜と茄子の粕漬け、宇治の玉露のお茶に、玉川上水の取水口の汲みたての水で出した「茶漬け」が一両二分というから、さきに騒がれた「吉兆」とても顔色なからう。例の魯山人の「星岡茶寮」(現・山王のキャピトル東急ホテルあたり)もこの流れと見てよいだろう。

先頃のミシュランガイドの格付けで、豪華な会席料理だけがもてはやされているのは考えものだ。

話を黒小丸に戻そう。

ゆっくりした休日。狭い我が家ながら、食卓に懐石膳を置き、照明をペンダント式

にして調光器で電圧を落とす。さらに蠟燭替わりの石油ランプで補光したあかりの下での一汁二菜を演じながら、粗末な内容の我が『陰翳礼讃』を楽しんで見て、いままさながら日本の幽玄さを再発見した次第である。

お大尽族は別として、普通の日本人は粗食の中で美を見出したのである。最近のマスコミが騒ぐ豪華な飽食風潮には、憤りを込めての苦言を呈したい。馬鹿らしい。

谷崎は『陰翳礼讃』の最後に「柿の葉鮎」の話を紹介している。吉野の山奥が生んだ珍味である。白洲正子も絶賛しているのだ。たびたび私も試み、黒小丸の飯椀にいれて食べる。

簡単に言うと、米一升に対し酒一合の割で飯を炊く。酒は飯が噴いてからいれる。冷ました酒飯を手に塩だけをつけ、削いだ荒巻鮎をうえにのせ握る。それを柿の葉の表を飯側にして巻き、乾いたお櫃にならべてお重しを載せ、一日置くと絶妙な「柿の葉鮎」が出来上がる。食する時に少しの酢を蓼の葉で振り掛ける。握る時は水気が入ってはならないとある。私の体験では塩の手が飯だらけになるので酢水で掌を濡らし

てから握る。鮎は刺身用の切り身を一塩したもので試みている。谷崎の言うように柿の葉の香りが鮎を包み、絶妙な味にかわるのは不思議な事だ。谷崎は「都会人が想像だにしなかった見事な田舎の贅沢な味だ」と細かな作り方をそえて紹介している。

家内の里は山形の庄内である。この庄内地方にも変わった鮎がかつてあった。「かゆ寿司」という。じつはこの風変わりな鮎はなぜか戦後の食料難の時期に全く途絶えてしまったらしい。

先日NHKで酒田の本間家につたえられた幻の「かゆ寿司」の想像の再現の話が紹介されていた。

その作り方は、飯と飯の三分の一の酒と糍を小甕にいれ、塩少々かけて三日から一週間炬燵の middle の温度に保ち発酵させる。甕は一日に数回かき混ぜて、酸素を補給させながら発酵をうながす。かゆとなった酒かけ飯は、甘酸っぱい寿司がゆに変わっている。そこへ「数の子」「人参」「ギンナ」「こんぶ」「ゆず」を細切りにして入れて一日味をなじませて出来上がり。

早速試して見た。これも奥深い北国(きたくに)が生んだ贅沢な田舎の味だ。家内の覚えでは、

食べる直前にとれたての生の鮎を入れたという。

家内も私同様、幼なかった遠い昔を思い出していたようだった。

事務局だより

※明けておめでとうございます。

今年も史遊会の創立精神「独断と偏見」をモットーに、一年を無事に過したいと希っています。

※「史遊会」の四冊目のエッセイ集の原稿締切りが三月末に迫りました。準備の方は進んでいるでしょうか。総会で話題になるとは思いますが、よろしくお願いいたします。

また「史遊会通信」合本の手配もはじめておりますが、こちらは四月あたりを目途にしています。大幅な修正はできませんが、文字の訂正くらいなら可能ですので、お申し出ください。

※一月は前年会費の納入月です。会員の方は、前期分九千円をお納め願います。